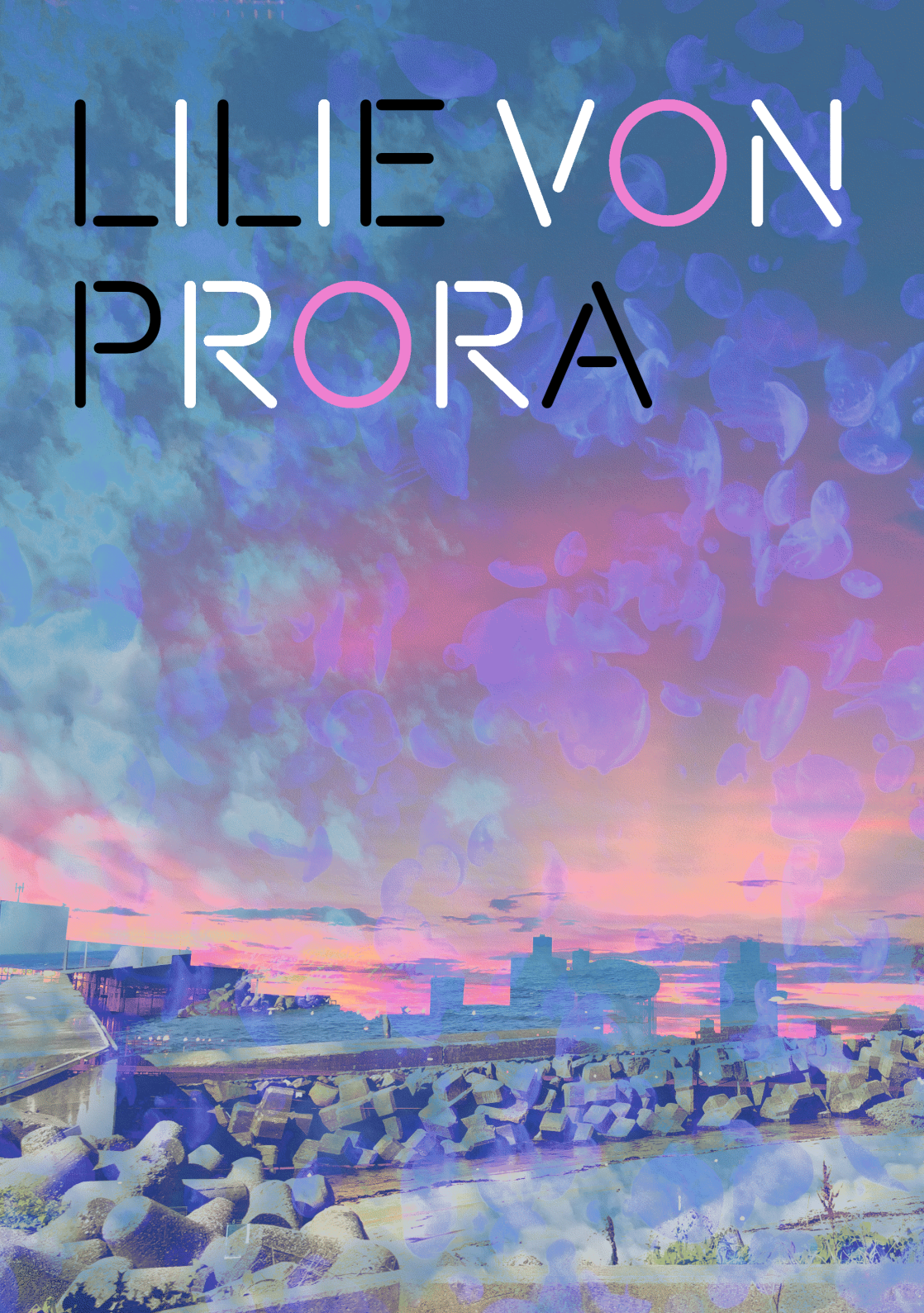
LILIE VON PRORA



Lilie von Prora

野沢菜
片桐天音
ジェンガ 2003
みみずの紐
早川一

【かつてよりそこに在りし】

そこにはかつての姿はない
それは何を夢見るのだろう
何を感じることができよう
過ぎ去りし栄華を懐かしむ者なし
生きていた、たしかにそこで
息づいていた
多くを目にした
悲喜交交を
始まりを、終わりを。

もくじ

浸透圧 5
しあわせミサイル 9
お腹の餡子が重いけど 21
海豚が食べたい 25
PARLOUR's Somnambulist 45
解説 49

かつてよりそこに在りし ―― 早川一
表紙デザイン ―― 片桐天音

浸透圧

野沢菜 (@burasica)

数年に一回、長老が選んだ者に、「禁じられた運河」を下る名誉が与えられる。この名誉は何よりも尊い物で、受け取った者は喜ばなければならない。私たちの居た集落に伝わる不文律だ。

名誉だとか言ってはいるが、要は爪弾き者を追い出すための方便でしかない。だから、事あるごとに長老に歯向かっていたテトラが、名誉を拝領することになるのは当然だった。

「外の世界、あんたも一緒に行くよね？」

拝領式の少し前、きらびやかに着飾ったテトラが、こんなことを言い出した。その瞳は、私を映している。

「嫌だと言っても連れてくからね、絶対」

その声に、澱みはなかった。そんなことはいざ知らず、長老たちは貼り付いた笑顔でテトラの門出を祝福している。

「ごめんね、長老！　あんたの大切な娘、ちょっと借りてくよ」

テトラが私の腕を引っ張って、禁じられた場所へ連れていく。

あの時、長老はどのような顔をしていたんだろう。今となっては思い出せない。

＊

「長老からパクったメモ、ちっとも役に立たないじゃん。『流れを下れ』って、一体なんなのさ」

そう言ってメモを睨み付けるテトラの姿を見るのは、これでもう何回目だろう。憎悪に突き動かされ、遠くまで響く声を張り上げていた頃はもう遠い昔、今では、ぶつぶつと悪態を吐くだけになってしまった。

目的地を差し示してくれるはずの憎き小運河は、ちゃぽん、ちゃぽんと音を立て、私たちをあざけり笑う。

いつになれば、長老の言っていた「海」に辿り着けるのだろう。

変わらない風景、いつ終わるとも知れない旅路。それらに滅入ってしまったのか、私たちの間には、深い沈黙と運河が出す波の音だけが流れていた。

「水に流されてしまえ。そうすれば、すぐに下っていけるじゃん」

そんな時、テトラが唐突にこんなことを言いだした。い

つもと違う、不自然な程に抑揚の無いその声は、私を不安にさせる。もし、水の中に入ってしまえばあなたは……と言いかけた時には、テトラは運河に釘付けになっていた。まずい、早く止めないと。

「入っちゃだめ！」

何を言おうとしたかも忘れて、ただただ声を張り上げた。私の声が聞こえなかったのか、テトラが運河に駆けていく。だめ、運河に入ったら、あなたは……

じゃぼん。

嫌な音がした。あぁ、遅かった。

「私が、溶けてる。どうして、なんで」

「大丈夫、大丈夫だから落ち着いて！」

運河から引き上げたテトラの体は、その輪郭を失いはじめていた。私を掴んだ指は一つにくっ付いていたし、瞼は溶けてしまい、瞳がどこにあるかも分からない。

「ちゃんと話を聞けば……ごめんね……」

かすかに開いた唇から、しゅん、とうなだれたテトラの声が聞こえる。溶けかけの体から、鼓動が、温もりが伝わってくる。大丈夫、まだ大丈夫、自分にそう言い聞かせる。

テトラが溶けて無くなってしまう前に、海へ辿りつかないと。あの子がそう望んでいたんだから。

＊

「海」にたどり着いたときには、テトラはほとんど溶けてしまっていて、その姿はまるでアイスクリームのようになっていた。

「ほら、見たがっていた『海』だよ」

聞こえるかは分からないけれど、耳のあった場所に声をかける。

「見えない……入りたい……」

口だったところに空いている穴から、かすかに声が聞こえる。消えかけのろうそくのように弱々しく、苦しそうな声が、私をもの悲しい気持ちにさせる。

今まで私を引っ張ってきてくれたテトラが、私のせいでこんな姿になって苦しんでいる。早く楽にしてあげないと。だけど、楽にしてあげた後、残された私はどうすればいいのだろう。

そうだ、もういっそ、一緒に溶けてしまおう。そうすれば、残されることもないし、この広い「海」で一緒になれる。

じゃぼん。

あの時とは違って、とても心地よい音がした。

＊

私が無限に広がっていく。見たことも聞いたこともない集落や、見上げることしかできなかった空にも、そしてあの憎き運河にも。

広がっていく中で、様々な人に会った。名誉を拝領してしまった人たちや、興味本位で飛び込んだ人。本当に多くの人に会ったけれど、その中にテトラは居なかった。

「ねぇ、久しぶりじゃない？」

気に留めていなかったところで、聞き慣れた声を感じた。やっと、見つけたんだ。

「外の世界、悪いものじゃなかったでしょう？」

いつもの自信満々な声に、私は頷いた。

しあわせミサイル

片桐天音 (@amane_katagiri)

彼女にべったりこびりついたしあわせは、なかなか落ちなかった。思い出してみると、私たちのエリアは特にHPSが良かったし、どうしようもない副作用なのだろう。

「お姉ちゃん、花火綺麗だね！」

ポップな絵柄の手持ち花火が、長い火花を出してよく光る。妹はその真っ赤な光を楽しそうに振り回しては、何度か私の顔を見て笑っていた。時折、火花が妹の顔を良く照らして、上気した頬が夜闇に浮かび上がる。

花火は、思っていたよりもずっと明るかった。クォーツが放つ燐光をかき消すようなその光に、私は何を託せばいいのだろう。

砂浜に振りまかれた花弁は散り散りになって、どこかへ消えていく。それが今の私たちの様子を暗示しているようにも見えて、どこか物悲しかった。

＊

私たちがこの浜辺のリゾートに連れてこられたのは、ほんの数ヶ月前――（GNC暦で）DAP年のA期――のことだ。私が数年ぶりに家に戻って間もなく、妹と共にこの国営保養地への移送命令が下ったのだ。おそらくは、成績低下を危惧したエリア長の策略だったのだろう。

父と母は優しく微笑んでいたけれど、どうしても私に向けられたようには思えなかった。

団地からの排除は、社会的な死を意味していた。妹もそれは良く分かっていただろう。弾けるような明るさを強いられているにも関わらず、焦燥と不安を隠し切れずにいるのを私は見逃さなかった。しばらく団地から離れていた私にとっては、不安よりはむしろ引っ越しの面倒さの方が強かったけれど。

とはいえ、リゾート自体は悪い場所ではなかった。粒の良く揃った砂が敷き詰められた砂浜に、その砂浜がずっと向こうまで透けて見える遠浅の海岸。植えられたヤシの木は人工樹で、こういう見せかけの植栽は団地とそう変わらない。汚れた空気ではまともな植物は育たないものだ。バスを降りた時に感じた呼吸の違和感は、そう離れた場所には来ていないことを暗示していた。

天気が良い時はずっと向こうに陸地が見えることもある。ずっと向こう――たぶん数キロメートルから数十キ

ロメートルくらい先――だと思うけど、汚れきった空気を通した距離感はあんまり信用ならなかった。

自然のロケーションは申し分ないにせよ、気になる点もあった。全長二キロメートルほどの巨大な居住棟が、砂浜と道路を分けるようにそびえ立っているのだ。その横の長さのせいで、六階ほどの低い建造物の割には異常なほどの存在感を放っている。

道路以外には見渡す限りの松林が広がっているだけで、それがさらにこの建造物の異常さを際立たせていた。

こんな大きな建物はエリア内でも見たことがない。その大きさの割に、手入れはしっかりと行われているようだ。地中海の風景を思わせる真っ白な外壁は、古くて巨大ながらも定期的に塗り替えられているらしい。

昔はもう少し賑わっていたのだろうか？　施設に面した道路に設置されたバス停は、縁石で塞がれてもう使われていないようだった。

そんな寂れた施設の割にはよく整えられていて、不自然ではあるけれどさほど不自由は感じない。

ただ、妹は団地外での生活のあれこれに慣れていないらしく、給仕を連れてきてほしいと訴えていた。入居の時に数人のスタッフに施設を案内されたけど、おそらく、ここに配置されているのは彼らだけだ。だから、専属で私たちの世話をする（まさに給仕のような）係が付けられることはなかった。

妹は無口で暗いナースたちを怖がっている。常識に反するからだ。ただ、最近は諦めたのか「負けないで頑張ろうね、お姉ちゃん！」なんて悲劇のヒロインじみたことを言うようになった。

笑える。

＊

私があのとき団地を出ることを許されたのは、単に私が妹よりも年上だったからだ。または、私にしあわせを醸成する素質がなかったからだ。

違う言い方をすれば、妹は幼かったので団地を出ることができなかった。つまり、妹がシステムに向いているかを判断するにはまだ時期が早かったのだ。

私が家族の許を離れる少し前に、妹に初潮が来たこと

は、私と母だけの秘密だ。母は娘を二人共失いたくはなかったから、そして私も、ある程度システムに組み込まれていたから、そういう自己犠牲は仕方がなかった。

団地での生活の中心には、いつもクォーツが据えられていた。各家庭に配置されたハート型のローズ・クォーツは、ほのかにピンク色の燐光をまとっており、触れると内部の光がはうように動くのが分かった。

このクォーツが、みんなのしあわせの象徴だという。触れると光と共に流れ込んでくる痺れるような感覚を、みんなは「しあわせエネルギー」と呼んでいた。

表面に彫られた「ねがいがかなう」の文字は不気味に輝いていて、見つめるたびに後ろめたい感覚に襲われた。教室の花瓶が粉々に砕かれているのを発見してしまったような、誰かの内臓が不用意に露出しているのを盗み見てしまったような、そんな感覚。

団地に収容された人たちは、一日に何度か（改正が繰り返されているが、私が家を出る前は二回で済んでいた）このクォーツに触れることを奨励されていた。手のひらを押し付けるように、三秒間だけ触れるのだ。

クォーツには目を開けたまま触れても良いが、一日に二度以上見つめながら触れてはならない。クォーツが放つ光が強くなるからだ。

各家庭に渡されたクォーツは心の拠り所であり、娯楽であり、ある種の監視カメラでもあった。クォーツを安置するクッションの周りはいつでも清潔に保たれており、全員でその神聖さを保ち続けている。人々はクォーツに触れることで団結していたし、それが団地のＨＰＳ向上の重要なファクターとなっていた。

タバコや酒をする人はそんなにいない。それがしあわせではないからだ。クォーツに触れた時に得られるある種の快感がそれらの代わりになっている、という主張は許されなかった。

私を見守ってくれるクォーツに一日に何度でも触れたいと思う。しあわせだからだ。大切な家族を、自分の共同体を、この国をいつも心から好きだと思う。しあわせだからだ。

嘘をつかない、不純なことはしない、クォーツを疑わない。しあわせではないからだ。どんなことがあっても、

自分の団地の外に出ようとは思わない。しあわせではないからだ。

国民全員を効率的にしあわせにするには、国民を集めて統一的な生活を送らせるのが最適な選択だった。少なくとも、全国の二十の巨大な団地では、そういうことが強いられていた。

エリアの周りは川で囲まれていて、無邪気な男子たちは毒の沼だと呼んで騒いでいた。私は汚水が垂れ流しになっているだけだと分かっていたけど、決してそう主張することはなかった。先生がそういうデマを叱りつけなかったからだ。

おそらく、私みたいな子は他にもいただろう。

＊

建物が赤く塗られている。A棟がすっかり塗り潰され、B棟も半分以上ペンキで塗り上げられていた。

その変化に最初に気付いたのは妹だ。数週間前から始まったそれは、模様替えというには唐突で、しかも派手すぎた。

しかし、こういうイレギュラーに特別弱いはずの妹は、むしろそのカラーリングを歓迎した。

「お姉ちゃん、赤ってテンションが上がる色なんだよ？」

「それは分かるけど、やっぱり急すぎるよ」

私たちの部屋はC棟の二〇二〇号室だ。朝から晩まで良く陽の当たる部屋で、レースのカーテンが作るふわふわとした影が波のように打ち寄せる。

遮るものがないおかげで、砂浜から水平線まですっぽり窓に収まっていた。窓からは赤い外壁が目に入らないから、少しだけ安心する。

小さなシングルベッドが部屋の両側に置かれ、その向こうには申し訳ばかりの小さな机が打ち付けられている。それ以外には、ごくシンプルな壁掛け時計に白い壁と木質の人工床くらいしか見えない。

妹が「きちんと片付けて」と言ってくるから、机には日記やペンを置くこともできない。生活感は嫌われていた。団地では、いつもそういう不必要なまでの整理整頓を励行していたのを思い出す。

食事は一日に三回、配膳車に載せられて部屋の外に置

かれている。少なくとも、このフロアには他に誰もいないようだった。メニュー自体に文句はないけれど、背中合わせでとる食事はそんなに気分の良いものではない。

妹はたまに早起きして、配膳係のナースに向かって執拗にクォーツへのアクセスを請願していた。

「まだ、かかるんですか。はい……いえ、分かりました」

クォーツに触れないと分かった妹は、決まってそわそわと落ち着かない様子を見せる。それは、彼女にとって相当なストレスだっただろう。明るくて元気な妹のイメージは、彼女自身をしっかり縛り付けていた。

だから私は彼女の整った爪がぼろぼろになる前に、海を歩こうと言って砂浜に連れ出すのだ。

三キロメートルほどの砂の散歩道を何度か往復し、日が落ちるまで座り込んで波の音を聴く。十日に一回くらいは、そういう何もしない日があった。

本当に何もしない休息日は、むしろ私のほうがそわそわする。奉仕に駆り出されている間は、休息日さえもしあわせへの活動に当てることを強いられていたから。

「お姉ちゃんは、クォーツに触れなくても平気なの？」

「そうね。私は、しあわせじゃなくなったから」

「……そっか。また、しあわせになれるといいね」

私がクォーツに触れる必要がないことを告げると、妹は心から憐れむような表情になる。妹だけではなく、たぶん、団地の誰もがそうするだろう。

団地を離れていなかったら、私もこうなっていたかもしれない。落ち着いたお姉ちゃんとしての、私に。

＊

私が団地――エリアの外に出て命じられた仕事は、しあわせの生産と、二酸化炭素の削減だった。人体実験じみたしあわせの抽出は非常に過酷で、私もB子も疲弊しきっていた。彼女は今どうしているだろう。

出身は同じだったはずだけど、第五エリアに戻ってからB子を見かけたことはなかった。まだ、しあわせを搾られて続けているのかもしれない。

しあわせが空っぽになると、巨大な勢力に反抗する心も失われるものだ。これらの手法のどれだけがクォーツに取り入れられるのか想像すると、苦しさが紛れた。

私が奉仕から解放されて家に帰ると、家を出る前とは別の給仕が付けられていた。給仕の任期はそう長いものではないし、私が戻ってくるまでの数年の間に三度は変わっただろう。均質化プログラムを正しく経た給仕は、後頭部に刻まれたアドレスでしか区別できない。

新しい給仕は、私の指令を聞こうとはしなかった。それも当然で、私にまだクォーツにアクセスできる権限がなかったせいだ。外から来た私が触るとクォーツが汚れるらしく、治療が済むまで通常の生活は禁じられていた。

クォーツへの接触は禁止されていながらも、両親は私がどうしても触りたがるだろうと思っていたらしい。憐れむような目つきが、その勘違いを良く物語っていた。

でも、触ろうとするそぶりも見せないと分かった後は、触りたがらないことすら忌み嫌っていたけれど。

「お姉ちゃん、ご飯だって」

「……うん、今行くよ」

変わったのは、給仕だけではなかった。

私の食器がなくなっていたのだ。妹とお揃いだったピンク色の茶碗は、たった一つしか残っていなかった。客用の食器は白くて、まるで空っぽの私の心を表しているみたいで。

父も母も私の涙を気味悪がって近付こうとはしなかった。たぶん妹も、私の涙に触れたらしあわせが失われると本気で思っていただろう。

「あのさ……私って、そんなに汚い？　そんなにしあわせが大事？」

立ち上がった私は、椅子が倒れるのも気にせずにリビングへ向かう。汚い涙を流しながら歩く私の一挙手一投足に、みんな困惑した視線を向けたままだ。

彼らは私から搾り過ぎていた。心がすっかりひび割れてからこんなところに戻されても、どうしようもない。

リビングに鎮座したローズ・クォーツを持ち上げる。体積の割に重く感じるエセ御神体は、手に乗せると光が強くなり、重心がぐるぐると動いているのが分かる。ぶちぶちとコードがちぎれ、そこでやっと、母の悲鳴と父の怒鳴り声がほぼ同時に響いた。よそ者の私が何をしようとしているのか、本能じみた部分で感じ取ったのだろう。

しかし、父の身を挺した飛び込みは間に合わなかった。

持ち上げたクォーツを床に叩きつけると、重いものがぶつかる鈍い音と、結晶が割れる鋭い音が辺りに響く。クォーツからはピンク色の液体が漏れ出し、それがすぐに紫色に変わって結晶状に固まるのだ。いびつな自己修復が自らの神聖さをかき消して、醜いものに変えていくのがたまらなく面白かった。

父は共同体での死を危惧したのか、すぐに私を犯罪者として通報した。私たちの移送措置が決定されたのは、それから間もなくのことだ。

娘に執着していた母さえも、私と目を合わせようとはしなかった。私たちを見送る時の両親の優しい笑顔は、監視カメラに向けたアピールだったと思う。

＊

夏の終わりに差し掛かり、また大きな異変が訪れた。

ピンク色の海に最初に気付いたのは、また妹の方だった。真夜中に私を起こした妹が、興奮しきった様子で海の様子が変だと告げたのだ。

ちょうどこの前建物の全面が赤く塗られてしまったから、おそらく寝ぼけて混同しているのだろう。そう思って相手にしなかったけれど、妹はそれからずっと起きて海を見ていたらしい。

朝になって窓から外を眺めてみると、妹の妄想が現実だったと思い知ることになる。

浜辺に降りると、鮮やかな色の海水にたくさんのクラゲがうようよ浮かんでいる。海水が汚染されているにも関わらず、透明度はほぼ変わらない。クラゲの向こうに海底の砂まで良く見えていた。

海水は黄灰色の砂にも良く染み込んでおり、夏らしい砂浜には団地を囲う毒沼のように乾いた汚れがこびりついている。

夏の終わりの風物詩が、こんなにも異様な風景になるとは思わなかった。

「あんまり近づくと、刺されるよ」

「でも、すごく落ち着くよ。お姉ちゃんもこっち来て」

「いいよ、私はここでいいから」

座り込む私をよそに、妹は大はしゃぎで水遊びを楽しんでいる。裸足でぱしゃぱしゃと水を跳ね上げては、身

体中に水しぶきを浴びて院内着に不規則な模様を刻んでいく。

海水はほぼ均質にピンク色で、水面と空が重なって紫色の水平線が広がっていた。水の中にはクラゲと一緒にときどき紫色の塊が浮かんでおり、鉱石が割れる不吉な光景を思い出す。これ、もしかして――

「お姉ちゃん、これ、クォーツじゃない？」

妹が、爪先に感じる違和感を拾い上げようとする。手で砂ごと掬い上げる動きがスローに感じられて、今からでも妹の手を止められるのではないかと錯覚してしまう。もともとここはごみ一つない綺麗な砂浜だったから、海水の変化と共に訪れたその異物に嫌な予感がした。

「見て見て！　やっぱり、クォーツだよ！」

指の隙間から砂が零れ落ちていくうちに、その結晶の姿があらわになっていく。

砂に埋まった三センチメートルほどの無造作な球体が、空気に晒されて光りだす。その塊は、ビーチグラス特有のマットな質感を備えていなかった。むしろつやつやとしており、人工物じみた光を良く反射している。さらに、そんなぎらぎらとした反射光だけではなく、内部から漏れ出る光がゆらゆらと砂に落ちて揺れていた。

ただの漂着物ではないのは明らかだ。

しかし、妹は漂着物の真贋を疑うべくもなく、満面の笑みでクォーツを握りしめた。一日に数秒だけ、しかも目を瞑って触らなければならないものを、こんなに摂取し続けたらどうなるかは考えていないようだった。

「すごい、これ、いつもよりもしあわせエネルギーが伝わってくる……」

手の隙間からは、砂浜に差すほどの強い光が飛び出し続けている。もはや妹が正気を保てるようには思えない。

十数秒か、あるいは数分か。みんながこの光景を見たら、きっと妹を天使だとでも思うのだろう。

妹が手のひらを開くと、クォーツが放つ光は元の弱々しい光に戻る。心なしか、内側に潜む光の動きの周期がさっきよりも早くなっているように見えた。

「ふー……満足。お姉ちゃんもする？」

私に歩み寄る妹の足がおぼつかない。「大丈夫だよ、お姉ちゃん」と言いながら砂浜をふらふらと歩く姿は、団

地で初めに教わるしあわせ酔いの症状そのものだった。
「私は、いらないってば」
「そっかー。気持ちいいのになぁ」
すっかりしあわせエネルギーを補充した妹は砂浜に横たわり、太陽にクォーツを透かしてみせた。妹の顔には紫の光が差して、まるで海の底で横たわっているようだ。
「食器のこと、ごめんね」
「何の話？」
「お姉ちゃんのお茶碗、捨てちゃったのは私なの」
呆けた顔の妹が、口だけを動かして声を出している。
奇妙なことだ。妹の記憶がどこからか呼び起こされている。何年も前に終わったはずのことを、何ら罪悪感なく行われたはずのことを、わざと揺さぶるように。
何がこんなことを喋らせているのか。
誰が、私を泣かせようとしているのか。
「いいよ……別に」
「ごめんね、お姉ちゃん」
そう言って、妹が指で私の目尻をなぞる。汚れた涙を掬って口に運ぶ。それから、妹は目を閉じた。
「お姉ちゃん。次は、ちゃんとするからね」
「そうね。だから、もうクォーツなんて――」
どろり。そのまま、妹は溶けて無くなった。

＊

妹がいなくなってすぐに、私はこのリゾートから去ることになった。大赦と書かれた命令書を見ても、妹を犠牲にして私が許されたのは明白だった。
団地に戻ると、父と母もいなくなっていた。より正確には、第五エリアがほぼ壊滅していた。私の家族が見せしめに処罰されたわけではなく、まるで団地全体がもう用済みとなって廃棄されたかのように荒れ果てている。
「競技場から開会式の様子をお伝えします。こちら、セントラル・トラックでは、全国三十二箇所で一斉に打ち上げる花火のタイミング調整が終了し――」
私が壊したローズ・クォーツも、床の傷だけを残してなくなっていた。
「これは、ＤＡ……失礼しました、二〇二〇年の集大成にふさわしいオープニングとして――」

久しぶりに見たテレビのニュースでは、聞き慣れない数字の暦を読み上げていた。アナウンサーも慣れていない様子で、何度もＤＡＰ年と言い間違えている。やっと、止まっていた歴史が動き出すのだ。

オリンピックのことは、伝説上のお祭りとして良く知っていた。夏の始めから夏の終わりまで開催され、しあわせが嵐となって吹き荒れて人々に祝福を与えると。

でも、リゾートでの夏の始まりは何事もなく過ぎ去っていた。だから、今年ではないと思っていたのに。

酷暑のせいでオリンピックの開催が延期された（たぶんこれもしあわせエネルギー上の調整だろう）と知ったのも、家に戻ってからのことだ。

今思うと、そこら中が赤く塗られていた異常な光景も、開催にかかる儀式だったのかもしれない。

「さぁ、打ち上げの瞬間です！　十、九、八、七、――」

打ち上げ花火を模したミサイルは、人々を効率的に殺傷する。強すぎるしあわせエネルギーは、実験室で何度も事故を起こしていた。

私はどんなしあわせを撃ち込まれても、きっと満たされることはないだろう。でも、会場に集まった人々はこれからしあわせミサイルに酩酊し、そのまま死んでいく。

誰かが死んでも、この粛清が終わっても、私はそのまま暮らしていく。暮らさなければならない。

「Ａ子。私たち、しあわせじゃなくて良かったね」

花火は、思っていたよりもずっと明るかった。クォーツが放つ燐光をかき消すようなその光に、私は何を託せばいいのだろう。

お腹の餡子が重いけど

ジェンガ 2003 (@NTSC_J)

どうして、いつもこうなってしまうのだろう。彼女は私の間違いを、いつも許してくれない。こんなとき、私の言葉は粘っこい憂鬱にからめとられて、肺のあたりで固まってしまう。沈黙は、彼女をさらに深く失望させたようだった。

「ちょっと、タバコ買ってくるから」

私はうつむいていることしかできなかった。

もうだめかもしれない、と思った。

私は、彼女が三割ほど残したコーヒーを飲み干した。すっかり冷え切ったコーヒーが喉を洗い流すのを感じながら、私はフローリングに仰向けになった。背中が冷たくて痛い。平たい床に寝ることもままならない私の身体。

急に、今度はいつもと違って、本当に取り返しのつかないことになったということが、はっきりとわかった。

身体が熱を帯び始め、天井の模様の輪郭が突き刺さるように感じられた。

私は身動きが取れなくなった。いつも私の思い通りになってくれなかった身体は、今度こそ完全に動きを止めるつもりのようだった。

天井が渦巻くように動き始めた。

液体のように体内を上下していた感情が撹拌され、赤紫色のどろどろした塊になっていく。

私は一匹のたい焼きになっていた。

＊

黙って出ていかれるほどのことをしてしまったらしい。

しかし、食べ物を床に置くとはどういう了見だろう。それも、たい焼き。私が餡子を食べられないことは以前から知っていたはずだから、私に買ったのではないのだろう。

そう、餡子が好きになれない。

理解してくれる人は少ないが、私は小豆の風味が好きではないのだ。それに、餡子はあまりにも甘すぎて、ひとくち食べただけでもう飽きがきてしまう。つぶあんは食べられないが、こしあんなら食べられるという人もいるが、私はどちらも食べられない。

＊

どうして、たい焼きなんか置いていったのだろう。

＊

たい焼きはもう二週間も冷蔵庫にいた。胴体の辺りは少し湿り気が増して、包み紙まで水気がしみこんでいる。包み紙に消費期限が書いてあるわけではなかったが、おそらくもうとっくに過ぎているのだろう。

私は冷蔵庫からたい焼きの包みを取り出してみた。久しぶりに本物のたい焼きを見て、私は大事なことを思い出した。たい焼きの尾の部分には、餡子は入っていないのだ。

包み紙から取り出し、手で軽く押して確かめてみると、やはり硬い感触があった。

中身がこぼれないように気をつけながら、尾の部分を手でちぎり取ってみる。思ったとおり、餡子は入っていなかった。

前歯で少しかじってみると、冷蔵庫の味がした。残りのかけらも口の中に押し込み、とりあえず飲み込もうとするが、乾燥しているせいで喉に引っかかる。

私は冷蔵庫から牛乳を取り出した。コップに半分ほどの量で、なんとか流し込んだ。

さて、残りをどうしたものか。私は食べ物を残すことが苦手である。理由はうまく説明できないが、小さい頃からそうなのだ。

何もせず放っておくわけにもいかない。私は包丁を取り出し、たい焼きの胴体を三等分しようとした。

最初の切れ目を入れてみると、想像していたのと違う中身が出てきた。中には餡子だけではなく、カスタードクリームも入っていたのだ。

これなら、うん、食べられるかも。クリームに口をつけて少し吸ってみた。

甘い。

クリームの油が、餡子の刺すような甘みを和らげていたが、それでも一瞬寒気がするほど甘かった。私はその一切れに歯を立て、咀嚼した。

口が甘いと苦いものが欲しくなる。コンロの上に置いてあったやかんを持ち上げると、確かな重さがあった。換気扇を回し、コンロに火をつける。

手持ちぶさたの私は、残りのたい焼きに取り掛かることにした。包丁で半分に切ってみると、今度は餡子ばか

りだ。

さて、困った。

やはり沸騰を待つことにした。

することがないと、いつも同じことを考える。どうすれば、幸せになれたのだろう。あるいは、もうずっと前に手遅れになっていたのだろうか。私が私の気持ちに沿って生きている限り、傷つくことも、傷つけることも避けられないのかもしれない。

気持ちも餡子のように柔らかく、形を変えられたらよかったのだろうか。

笛の音が思考を中断させた。

私は火を止めて、戸棚のインスタントコーヒーを取り出し、コップに粉を注いだ。やかんの熱湯を注ぎ、コップを揺らして混ぜる。

熱いコーヒーを一口だけすすると、安い風味と雑っぽい苦味が舌を覆いつくした。

さて。

私はたい焼きを食べつくす覚悟を決めた。

一切れの半分ほどにかぶりつくと、強烈な甘みが広がった。すぐさまコーヒーを流し込む。

こうすれば、うん、まあ食べられるかな。もう半切れも同じように流し込んだ。

残るはあと一切れ、頭の部分だ。

私は意気揚々とたい焼きの口元にかぶりついた。懐かしいもちもちとした食感に私は驚いた。

頭に餡子と一緒につまっていたのは、求肥だった。

海豚が食べたい

みみずの紐（@mimizunohimono）

「おねーさん、何してるの？」
「ん？」
　ししゃもの口元に釣り針を引っ掛ける作業で苦戦していると、少女が声をかけてきた。休日であってもセーラー服を着こなすのは、最近の女子高生のトレンドなのだろうか。
「見りゃ分かるでしょ……釣りをしてるのよ」
「いやー。また随分リッチな餌を使っておるなー、と思って」
「餌の種類ぐらい好きに選ばせなさいよ」
「お姉さん初心者？」
「素人は釣りしちゃいけないの？」
「んもー、そんなにツンケンしねぇでおくんなまし。アタシゃ女一匹の釣り人が珍しいもんで、ちょっくら声をかけただけだから」
　先程から言葉使いが妙というか、センスが古臭い女の子だ。心なしか彼女のセーラー服からも、どことなく昭和の香りが漂う。
「で、お姉さんは何釣ろうとしてんの？」
「……カ」
「へ？」
「イルカよ」
「い……イルカ？」
「そうよ、イルカだけど……何か文句ある？」
「……」
　一瞬の静寂を挟んでから少女は膝を叩き、溜め込んでいた息を一気に噴出した。
「ブハッ！　イッ……イルカを……リールでもって……イルカの一本釣りって……」
「何よ。イルカだって、ちゃんとこの辺りに生息してるじゃない」
「はーっ、おっかしいおかしい！　いやさ、お姉さんの努力は認めるんだけどもさ」
「はぁ」
「少なくとも、リールで一本釣りはちょーっと厳しいんじゃないかな。もっと船でもって沖に出て、追い込み漁でもしないと」
「……船なんて出せるカネもコネも無いわよ」
「それもそうね。でもたまーに、海釣りでイルカの赤ん

坊を引っ掛けちゃう事故もあるって聞くね」
「ほら、一応はありえるじゃない」
「でも最初からイルカ釣りを目的に来た人なんて、アタシは生まれてこの方初めて見たよ」
「へぇ。そりゃまた珍しい人に出会えましたね。じゃあ私は釣りに戻るんで」
「へぇ、どうぞどうぞ。ご自由にやってくんなせぇ」
人差し指で釣り糸を抑え、竿を大きく振りかぶり、仕掛けを海へと投げ込む。と、同時に重みの消える感覚が指先から伝わってきた。ししゃもは釣り針の束縛を逃れ、元の海へと還ったらしい。
背後からクーックックッという忍び笑いが聞こえてきた。どうやら一人にはさせてくれないようだ。嗚呼、全くもって鬱陶しいったらありゃしない。

＊

リールを引きながらぼんやりしていると、またしても少女が声をかけてきた。
「で、何でわざわざイルカを？」
「何でって……」
「だってこの街、わざわざ外国からイルカの保護団体が来るぐらいには、人間がイルカに対してセンシティブじゃない」
一応周囲を警戒してはいるが、それらしき外国人の姿はまだ見えていない。
「近ごろ法律改正でイルカの捕獲も禁止されたのに、どうしてそんな危険を犯してまで？」
「貴女、また随分と唐突に真面目な話を始めたわね……」
「別にお姉さんを通報するつもりは、微塵もございませんから」
「それって脅しのつもり？」
「まっさかぁ」
「……ふん、まぁ別に知られてもいいわ。いい、お嬢さん？　答えはシンプル、お金のためよ」
「またえらく直球な」
「私ね、ホームヘルパーを務めているの」
「介護士？」
「そうそう。それで今訪問介護で担当しているのが、向

こうの切り立った崖の上にある、立藤さんっていうお家のおばあちゃん」

「あーはいはい、あのだいぶ辺鄙なところの」

「そうそう。で、そこで介護しているふみよさんが米寿を迎えるから、記念に何か食べたい物はありますかー？　ってお聞きしたのよ。そしたら」

「イルカが食いたい、って？」

「ええ、その通り。最初は耳を疑ったけど、本当にイルカが食べたかったみたい。小さい頃食べたあの味が忘れられないらしくて」

「イルカ肉って……このご時世でも食べられるのか？」

「昔はスーパーの鮮魚コーナーでも普通に並んでいたらしいけど、今となっては一部の脱法イルカ肉が高級料亭でこっそり出回る程度みたいね。そんな違法品、一般人にとっては関係のない話だけど」

リールを引ききったので、再度仕掛けを海に投げ込む。

「で、何としてでもイルカが食べたい立藤さんは、ヘルパーとしてではなく、私に対して個人的な依頼を申し出たの。この仕事を十年続けても手に入らない、とんでもない報酬で」

「お婆さん持ってやがるな」

「むかし仮想通貨？　ってやつに入れ込んで、長らく放置してたら随分値上がったんだって」

「そりゃ大した先行投資だなぁ。で、それを二つ返事で引き受けたの？」

「まさか、流石にお断りしたわ。イルカなんて水族館ぐらいでしか見たこと無いし、方法も検討がつかないし、犯罪はご勘弁願いたい」

「そりゃそうだ」

「ところが最近事情が変わった」

「事情？」

「一昨日の晩、私が家に帰ったら、かのj……いや、元同居人の姿が綺麗さっぱり無くなっていたの。通帳とへそくりも一緒に」

「あれま」

「口座のお金もすっからかん。財布の中身も切羽詰まって、いよいよ四の五の言ってられない状況になってしまった」

「そりゃ困った」

「せめて四桁の暗証番号を、あのヒモ野郎の生年月日にしておくべきではなかったわね」
「それはお姉さんが悪いのでは……」
「そういうわけで今月分の家賃を稼ぐためにも、捕れたてピチピチで新鮮なイルカが早急に求められるってわけよ」
「ふぅーん……それで藁にもすがる思いで、慣れない釣りに精を出しながらイルカ探しって訳か」
「そういうこと」
「で、釣れると思う？」
「確信はないけど、自信はある」
「どうして？」
「どうしてって言われても……強いて言うなら」
「言うなら？」
「この浜には……イルカの印象が強いから」
彼女は意外だとでも言いたげな表情を浮かべた。
「そう？　イルカ漁で有名だったところといえば、もっと南下したところの海岸じゃなかったかしら？」
「それもそうなんだけど、それに何でかも思い出せないんだけど……イルカって聞いて、私が真っ先に思い浮かぶのはこの浜なの」
「ふーん、そういうもんなのかねぇ……」
水の上に揚げられた仕掛けはまたしても、投げ込んだ時と同じ状態で返ってきた。

＊

いよいよとっぷりと日も暮れてきたので、本日の釣りはこれぐらいで止めにしておこう。
私は余ったしゃも達をぢっと見つめ、このまま全て海に投げ込んでやろうかとも思ったが、背後から少女の物欲しそうな圧を感じ取った。
「食べる？」
彼女はコクコクと頷く。一匹、二匹そちらに放り投げてやると、彼女は一匹ずつそれを受け取って、美味しそうにむしゃむしゃと頬張った。欲張りな奴だ。
「ときにお姉さんや」
「ん？」
「お姉さんのお名前はなんてぇの？」
「どうしたのよ突然」

「いや、ここまで親密になってきたんだから、次はお互いの名前を知る段階かなって」
「今のところ、そこまで親密になる要素あったかしら…？」
「ええからええから」
「人に名前を尋ねる時は、まず自分から名乗るのがセオリーじゃなくて？」
「セオリーってなんだ？　お菓子の名前？」
「……貴女との会話って、疲れるわね」
「そう？　そんなこと初めて言われたよ」
「……アスタ」
「へ？」
「明日に太郎の太で、明日太。ね？　女の子なのに、変な名前でしょ」
　子どもの頃からこの「明日太」という男の子のような名前だけは、どうも好きになれなかった。いくら私が歳を取り容姿が変化しようとも、きっとこの名前だけは死ぬまで私を憂鬱にし続けるのだろう。
「ふーん、いい名前じゃない」
「心の底からそう思ってる？」
「うん、何というか男の子みたいに格好がよくて、可愛いらしい響きがある」
「ふん……」
　心にもないお世辞だとしたら別にどうでもよいが、名前で褒められたのは初めての経験なので、少し戸惑ってしまった。
「……それで？」
「それで、って？」
「いやいや、アタシの名前も聞き返してよ」
「えぇ……？　いいわよ別に……」
「えっ、何で？」
「必要以上に他人から個人情報を聞き出そうとは思わないわ」
「いやいや、そこは名前聞く流れでしょ。こちらからぜひともお願いしますんで」
「えぇ、一体なんなの……？」
　一発で彼女の要望を理解するのは難しい。
「それじゃあ、貴女のお名前をお聞かせ願えるかしら」

「ふふん、よくぞお尋ねくださった。耳の穴をかっぽじって聞き入るがいい」
「急に大きく出たわね」
「アタシの名前は、立藤千鳥！」
「立藤……うん？　立藤？」
「そう、聞いて驚くがいい。アタシこそが立藤ふみよのひ孫、立藤千鳥である！」
「あー……はいはいなるほど。私が新任のヘルパーだから、様子でも見に来たとか？」
「えっ、そ、それもあるけど。もっと何かこう、リアクションとか……」
「え？　特にないけど」
「うん……」
「ああでも、ふみよさんに目元とか口元とか似ているような気がしなくもないわ」
「そっか、その程度なのか……」
彼女にとってはサプライズっぽく伝えたかったのかもしれないが、ちょっとだけ不憫に思った。もう少し驚いてあげてもよかったかもしれない。
「それじゃあ貴女はこの近くに住んでいるの？」
「おうよ、生まれた時から多分死ぬまでこの街の人間よ」
「でもふみよさんは独り暮らしなのね」
「流石に場所が場所だからな、誰も寄り付きたがらん。で、そんな事よりお姉さん」
「何かしら」
「婆さんが何やらどでかい遺産を隠し持ってるって噂。あれ本当だったんだな」
「まぁ隠し持っているというか、持っていた財産の価値が高まったというか……」
「お姉さんや、ここで一つ提案がある」
「はい、何でしょう」
「立藤の婆さんから大金を引き出すため、アタシと手を組んでみないか？」
「手を組む？　どうやって」「まずアタシがイルカ捕獲のメソッドをコーチしてあげる」
「貴女そんなにイルカに詳しいの？」
「えぇ、少なくともお姉さんよりは。イルカについては生態系・性質・漁の方法まで熟知しておるぞ。町内一のイ

ルカ博士と呼んでもらっても差し支えないわ」
「どこで勉強したのよその知識……」
「イルカマニアですから」
妙に悔しいがこの自信たっぷりな口ぶりからは、無謀にもイルカの一本釣りを試みようとしようとしている私よりか、有益な解決手段が得られそうだ。
「次にメソッドを叩き込まれたお姉さんが、イルカを捕縛する」
「ふむ」
「後は調理した状態で婆さんの眼の前に提供して、婆さんが報酬として差し出す遺産を山分けしようって算段だ」
「貴女ねぇ……これは余計なお世話だけど」
「何か？」
「自分の親族からお金を巻き上げる行為に対して、何かしらの罪悪感が湧いたりはしないの？」
「どうせ婆さんがくたばってから貰うか、親孝行していま貰うかしか違わんよ。それならなるべく早い方がええ」
「また随分とドライな考え方をお持ちのようでして」
「じゃあそういうことで」
「どういうことかしら？」
「明日からよろしくな。アスタ」
立藤千鳥さんは右手を差し出した。
「もう貴女の中での私は名前呼びの上、片棒を担ぐことになっているのね……」
「おうよ」
呆れ返って反論も出てこない。
「とは言えどうせ目的は同じだし、私はこのままだと無為に時間を費やしてしまう」
「そうそう」
「……午後はヘルパー業務があるけど、午前の一時間程度でよければ空いてるわね」
私も右手を差し出し、固く握手を交わした。彼女の肌は驚くほどにひんやりとしており、触ると気持ちがいい。
果たして彼女との関係が、私にとって得となるか損となるか。もう少しそろばんを弾いてみないと、未来までは読めないだろう。
「それじゃあよろしくね、千鳥さん」
「うん。よろしくな、アスタ」

＊

こうして翌日の早朝から、千鳥さんによるイルカ狩り講座が始まった。

「それでは始めましょうか、アスタくん」

「よろしくおねがいします、千鳥先生」

「まずイルカには色んな種類があります」

「ほうほう」

「そのうち日本で見られる種類は、スジイルカ、ハナゴンドウ、マダライルカ、バンドウイルカ……ざっとこんなところかな」

「よくまぁスラスラと出てくるわね」

「で、この中で一番捕獲しやすく、味がいいのはスジイルカ。ひとまずはこいつの捕獲を目指しましょう」

「スジイルカね、覚えておくわ」

「で、お次はコレ」

そう言って、千鳥さんは金属製の長い串のような器具を取り出した。串に対しては垂直となるような持ち手部分がついており、丁度アルファベットのTの形をしている。

「これは？」

「これはね、金属ピン。イルカを殺すための道具」

殺す、という物騒な単語が突如飛び出し、思わずギョッとする。

いや、何を今更言うか。今までただ、直視しないよう目を逸らしていただけじゃないか。イルカを捕まえて食べるという行為は、当然イルカを陸に打ち上げて殺す行為と同義なのだ。

「これをイルカの頚椎めがけて勢いよく突き刺すと、脳への血流が停止し、苦しむことなくおっ死ぬ。まぁその方がお互いにとって楽な訳だ」

「そうね……ええ、その通り。異論を挟む余地もなくその通りなんだけど、ところで」

「はいさ」

「何でそんな物騒な物、貴女が持っているの？」

「え？　ストーカー対策に」

「最近の女子高生は物騒ねぇ」

「ということで、今のところ考えられるプランはこうだな。まずお姉さんがスキューバダイビングでイルカに急接近」

「泳ぎは得意じゃないんだけど」
「次に何かしらの音を出しながらイルカをうまいこと海辺へ誘導し、イルカのエコーロケーション機能をずたずたに狂わせてやる」
「なかなか酷いことするわね」
「後は衰弱してきたイルカの頚椎めがけて、ブスリと一突き」
「そこが最大の難所ね。物理的というかは、倫理観的に」
「そのうちきっと踏ん切りがつくわよ。それじゃあ、今日のレッスン内容はこれ」
「これは……鶏胸肉の塊？」
「今日はこの金属ピンで、肉に突き刺す素振りをしてみましょう」
「なるほど……あっ、結構奥まで挿すには力がいるのね」
「うん、いい感じ。じゃあ今日は、これの抜き差し訓練を百回ほどやってもらおうか」
「えっ」
翌日は一日中筋肉痛に苦しめられた。

＊

また別の日。
「えー、続きまして本日は近所のスーパーにやってきました」
「千鳥、貴女やってることが段々と、動画配信者みたいになってきたわね……」
「本日はイルカが餌として食いつきそうなお魚を、市販の魚類コーナーから探してみたいと思います」
「この前の釣りの時にはししゃもを使ったけど、その他の魚でも問題ないの？」
「あぁ、大体魚と名がつけば何でも。サバ、タラ、ホッケ、イカ、エビ……じゅるり……」
「魚じゃないのもいるし。割と見境ないわね」
「なっ！？　これでもイルカはグルメなんだぞ！　ちゃんと味の選りすぐりをするんだぞ！」
「そこは肩を持つところなんだ……」
「で、イルカはこれらの餌を、一日に五キロ近くも食べるそうだ」
「相当な量ねぇ。さぞかし水族館も食費がかさんで大変でしょうに」

「だろうな。えーということで、今夜はイルカのお気持ちを理解するために、これらの食材を買って寄せ鍋にしたいと思います」
「勝手に決めちゃったよこの子は。そのお金は一体何処から捻出されるのかしら」
「あら、アスタ。貴女、高校生の財布からお金を出させる気？」
「私がカツカツの切り詰めた生活を送っている事実、貴女ご存知でなくて？」
「いいじゃないのたまには。それにイルカが手に入れば、どうせ一攫千金になるんでございましょ？」
「はぁ……仕方ないわね、魚介類を二、三種類に絞って買い物カゴに入れておいて頂戴……」
「イエーイ」

＊

こうしてイルカ漁の方法に関する知見も、私の中でゆっくりゆっくりと深まってきた。
私はイルカを見ただけで、その頚椎の位置を概ね把握する目を手に入れた。泳ぎながらイルカを抱きかかえた状態であっても、秘孔へと確実かつ垂直に金属ピンを打ち込める腕を手に入れた。
仮に今ならばイルカの水槽に放り込まれても、確実にそれを屠れるであろう。あとはいつか与えられる実践の機会を待つのみ、という状態まで仕上がっていた。
午前中は千鳥と落ち合い、イルカに関する何かしらのレッスン……という名を称した、実質千鳥の暇つぶしに付き合ってやる。お昼ご飯を一緒に食べて、午後からはヘルパー業務。夜は時折千鳥と夕飯を食べる、という生活を続けていると、当たり前ではあるが、生活の中で千鳥の占める割合は日に日に高まっていく。
千鳥と共有する時間を増やせば増やすほど、私は一緒にいる時間を愛おしく感じるようになってきたのだ。

＊

懐かしい夢を見た。
あれは古く錆びついた記憶。そこに両親はいない。私が独りで遊びに来た人気のない砂浜。その砂浜に小さな

イルカが一匹、打ち上げられていた。

私が助けようとして何度押しのけても、それはまた砂浜へと打ち上げられてしまう。何度やっても、何度やっても、イルカは大海原へ戻ろうとはしない。そのうちに私は、大声で泣き出してしまった。

偶然にも、その鳴き声を嫌ったのだろうか。イルカはゆっくりと砂浜を離れ、ふらふらと泳ぎながらも、もう戻ってくることはなかった。私は手を振った。もう帰ってくるんじゃないよ。悪い人間に捕まっちゃうよ。

イルカの姿はもう見えなかった。

＊

「っ！」

時計の文字を確認すると、一時を少し過ぎていた。一瞬昼過ぎまで寝過ごしてしまったのか？　という恐怖で全身が硬直したものの、カーテンの端から伺える外の景色にはまだ光が灯っていない。よかった、もう一眠りできる。

「ん〜、どうかしたのアスタ……？」

布団の中から声が聞こえる。

「あっ、起こしちゃったかな。ごめんね、千鳥」

「いいってことよ」

「申し訳ついでに一つ聞きたいんだけど」

「何を？」

「どうして私達、一緒のベッドで寝てるんだっけ？」

「そんなの夕飯一緒に食べて、アタシが今夜は帰りたくないって言ったら、アスタが泊まらないかって提案してきたからじゃない」

「いや、確かそこまでは記憶があって、その後お酒を呑んだんだ」

「うん、そうだった。確か発泡酒を一杯」

「それで今、どうして私達はお互いに全裸で抱き合っているのかしら？」

「アスタが暑くて寝苦しそうだったから、アタシが脱がしてあげた」

「じゃあ千鳥は？」

「私はほら、服を着ながら寝るのが嫌いだから。なんか抵抗感あるじゃない？」

「貴女はもう少し、自分の裸に価値があることを覚えた方がいいわね。安売りは駄目よ絶対……」
「こんな格好、アスタの前でしかしたことないよ」
「うん、それならよし」
改めて布団にくるまったものの、徐々に心音の高まりを感じる。酔いが覚めたのも手伝い、段々とこの状況に緊張を覚え始めているのだ。
いったい私は酔った勢いで、どこまでやってしまったのだろうか？　この千鳥の反応を見る限りには、まだウブという推測をしても問題ないのだろうか？　あれ、そもそも親の同意を得ずに泊めたってことになると未成年者略取になるのでは？
様々な疑念と熟考が入り混じり、頭の中に含まれる賢さが損なわれ始め、眠気もどこかへ吹き飛んでしまった。
一度落ち着きたい。安心感を得たい。
「あの、さ。千鳥」
「どしたの？」
私は壊れ物を扱うが如く、彼女を優しく抱き締めた。
「こういう行為って……貴女は抵抗がある？」
「あー、ひょっとして女の子同士でのハグ？　私の地元では結構珍しくないわね。アスタってそういうの好きなの？」
「えっ、ま、まぁ。男の子よりは女の子かな……」
「じゃあこういうのも好き？」
突如右頬に柔らかいモノが当たり、千鳥の唇がゆっくりと離れていく。
「最近の女子高生ってすげぇな……」
「心の声が漏れてるわよ」

＊

「それにしても私、千鳥と出会ってから、まだ一ヶ月も経ってないのよね」
「そういえばそうだな」
「私、驚くほど貴女の事を知らない。ふみよさんに聞いても、千鳥は優しい子だからねぇ、としか言わないし」
「そっか……婆さんはそんな反応なんだ」
「どうしたの？」
「いや、何でも。うーん……」
千鳥は少し悩んだ表情を見せた。

「それじゃあ、少しだけ昔の話でもしてみようかしら」
「うん、聞かせて」
「私ね、小さい頃いじめられてたんだ」
「いきなりヘビーなところから攻めるわね」
「声の高さが他と違うとか、集団に馴染めないとか、切っ掛けはそんなくだらないことから」
「本当アホくさいわよね、そういうの」
「それからある時、それが原因でついうっかり死にかける経験をした」
「なにそれ、警察沙汰じゃない」
「ううん、そういった類の話ではないんだ。それは私の落ち度でもあったし、悪い経験でもなかったから」
「そんな……どうして？」
「なんて言えばいいかな。死の際に立つことで外の世界への視野が広がったから」
「外の、世界……」
「一人の女の子がね、その時瀕死だったアタシを救い出してくれた。何の損得も考えずに、何度も何度も、長い時間をかけて」

千鳥はどこか遠くを見つめながら、言葉を続ける。
「そうして生死の境を彷徨った直後にはね、アタシの中には命がまだ潰えていないという安心感も、彼女に助けてもらったという感謝の気持ちもあった。けれど、それ以上に嬉しかったのは、その人が外の世界に居たっていう事実なんだ」
千鳥は少しずり落ちたブランケットを引き上げ、二人の肩の高さまでもってくる。
「こんな陰鬱とした閉鎖的環境から、一歩引いた視点を持ってもいいんだって。嫌になったら、外の世界に逃げちゃえばいいんだって。当たり前だけれど、殻にこもっている間は生まれてこない発想なんだよ」
「それじゃあ、今は？」
「えぇ、かろうじて外に逃げられた。今のアタシはとても自由」
「その命の恩人とやらには、お礼が言えたの？」
「そのあと神様のめぐり合わせなのかな。会うことはできた」
「よかったじゃない」

「でもまだお礼は言えてないから、これからになる」
「いつか伝えられるといいわね」
「うん……」
徐々に眠気が訪れ、瞼も限界とばかりに垂れ落ちる。
「……ねぇ、アスタ」
「何かしら」
「……ごめんなさい、それから、ありがとう」
もし叶うのであれば、それがどういった意味を持つのかを聞いてから、眠りに落ちたかった。

＊

次に時計を目にしたのは、正午になる直前だった。寝ぼけていた頭が急激に冴え渡る。
「千鳥！　一緒に外出るから起きて……千鳥？」
いつの間に彼女は帰ったのだろうか。今日は時間の都合もあるので仕方ないが、どうせまたあした砂浜に行けば落ち合えるだろう。
慌てて髪をゴムで束ね、介護ユニフォームを着用し、ヨーグルトジュースを胃袋に流し込みながら家を飛び出し、愛車のヤマハ・トリッカーに跨がってエンジンを掛ける。立藤家まで物理的な距離は大したことないが、立地が崖の上なので、だいぶ遠回りする山道を低い馬力で無理やり駆け上がる必要があるのだ。
「こんにちは。あら、お久しぶりです」
勤務時間開始と共に滑り込んだ立藤家には、ふみよさんと食事を取る立藤の息子さんの姿が見えた。息子さん、とは言っても私より御年をずっと召された、定年間近のおじいちゃんだ。常にパリッとしたスーツに身を包んでいるからかだろうか、白髪に皺だらけではあるが、いつでも快活な印象を与える。
「おぉ、ヘルパーさん。お昼がまだでしたら、ご一緒にどうです？　冷や麦を茹ですぎてしまってね」
「ありがとうございます。せっかくの申し出ですが、一応業務中なので……」
「遠慮なんていいのいいの。私がお金を出してヘルパーさんを雇ってるんだから、私がＯＫと言ったらＯＫだ」
「では……ありがたくお言葉に甘えて」
昼飯代が浮くので、正直こういった申し出は大変あり

がたい。

「その代わり、母に食べさせてやってくれないか？　冷や麦をフォークですくって口元まで運ぶのが、思っていたよりも難しくてね……」

「そうですよね。最初ヘルプをする時、麺類は結構難しいですよね。はーい、ふみよさーん、お口開けて下さーい」

「んぁ……こりゃなんだい……？」

ふみよさんがしわくちゃの口を開けるので、そこに少量の麺をとり、めんつゆをさっと通してから流し込む。彼女はしばらくもぐもぐやってから、ポツリと感想を述べた。

「うんうん……冷や麦も悪くは無いけど、たまにはこってりした海豚が食べたいわねぇ……」

「ったく、婆さんまたぼやいてやがるな。イルカがどうとか」

「最近特にですね。イルカについては相当ご執心のようです」

ふみよさんからの個人的な依頼については、息子さんに伏せていた。議論を挟む余地もなく彼から反対されるのは目に見えているし、何よりもふみよさんの意志に反するからだ。

だから私はそっけない風を装った。

「そういえば最近なんですけど、お孫さんと仲良くさせて頂いてるんですよ」

「あぁ、千鳥かい。千鳥は優しい子だからねぇ」

「えっ、千鳥と……？」

一瞬、息子さんの表情が曇る。しまった、話を通しておくのがスジだっただろうか。

「ええ、千鳥さん。先日たまたま海釣りの場所で偶然見かけまして、話をしていたらすぐに意気投合して……」

「ヘルパーさん。いくら何でも、冗談はやめてください」

「え？」

「孫の千鳥は、昨年亡くなりました」

「は……？」

＊

《朝、いつもの砂浜で待ってます》

明くる日、携帯に届いた一通のメール。いつもの時間に訪れた砂浜には天気もよく、朝早くから海水浴を楽し

む家族連れやカップルの姿がちらほら見受けられる。

立藤千鳥、推定享年十六歳。昨年観光目的で遊覧船に乗船し、デッキの手すり部分に腰を掛けていたところ、手すりの金属部分が外れたため海へ直接滑落。海上保安庁による必死の捜索にもかかわらず、最終的に遺体は発見されず行方不明となった。

何故彼女は立藤千鳥を名乗っていたのか、一体何が目的で私に接近したのか。今日は問いただされないといけないことは山程ある。

それにしても彼女、いつもより遅いなと思っていた刹那——男の悲鳴にも似た怒号が周囲に響いた。

「イルカだぁ！　イルカが人を襲ってるぞ！」

続いて子どもの悲鳴、その母親らしき女性の悲鳴が白昼の海水浴場に鳴り響く。

海水浴客達は一気に集まって野次馬の集団を成し、「イルカ？」「子ども？」「一一〇番じゃなくて一一八番？」などと思い思いにつぶやき始めた。

眼前には異様な光景が浮かんでいた。小学生ぐらいの男の子が泣き叫びながらビーチボートへ必死にしがみつき、その周囲を一匹のイルカが旋回している。イルカはギザギザとした細かな歯をぎらつかせ、隙を見計らっては噛み付こうとする素振りを見せた。

その獰猛で好戦的な動きからは、鮫を思い起こさせる。このままではあの男の子が怪我をしたり、下手をすれば溺れ死んでしまうかもしれない。

だがこの場で最も異様な存在は、野次馬を成す人間達だった。誰も手出しができず、しようともせず、ただ安全地帯からスマホを片手に撮影して眺めるだけ。

ああもう、早く通報しなくては……携帯をつかもうとカバンに手を伸ばし、いつものイルカ殺傷用金属ピンが手に当たった。

違う、そうだった。

私が今やるべきことは、イルカへの殺戮だ。この場にいる人間の中で、あのイルカと対抗できるのは私しかいないのだ。私は腹の底から放った「どけ」の一言で有象無象をかき分け、予めレッスンを想定して着込んでいた競泳用の水着一丁となり、金属ピンを片手に海へと飛び込んだ。

まずは男の子の安全確保からだ。息継ぎなしの高速クロールで波をかき分け、気性の荒いイルカの隙を縫って、男の子に近づく。

「坊や、大丈夫？」

「うん……」

「そのままビーチボートに捕まって、私が誘導するから」

私たちはしばらくイルカとの距離を一定に保っていたが、男の子はいよいよ足の届く浅瀬までついてこれたので、後は近くまできていた母親に預けることにした。

イルカは男の子から私へとターゲットを切り替えたらしい。上等だ。もうお前の頚椎の位置は掴んでいる。

私は全力でイルカの方へと泳ぎで接近し、

イルカの全身を鯖折りで抱きかかえ、

逃げようとするイルカのヒレを握り掴み、

手元の金属ピンの位置を調整し、

昨晩千鳥にしてやったように抱擁し、

金属ピンをゆっくりと肉に差し込んだ瞬間……声が聞こえた。

「いててっ」

「この声……嘘、千鳥？」

「あーあ。やっぱり、分かっちゃったか」

「貴女、イルカだったのね……」

「そう。人に恋して、人に憧れて、人に殺された情けないイルカ」

「どうして？　貴女は最初から殺されるつもりで……」

「貴女に命を助けられてからずっと尽くしたかった。どんな小さなことでも貴女の力になりたかった。だから去年千鳥という若いおなごの肉が空から降ってきたのは、本当に偶然の賜物であり、天の祝福だった」

「嘘、嘘でしょ？　これで……お別れなの？」

「いいや。貴女には一つお願いがあるの」

「お願いって？」

「アタシの肉を食べてほしい」

「千鳥の……肉？」

「そうだ。アタシは元の千鳥の紛い物に過ぎない。だから千鳥ではなく『私』として貴方に与えられるのは、私を構成する要素だけ。貴方に食べられた私の肉は、貴方の構成要素としてずっと一緒にいることができる」

「そんな……でも、食べるなんてそんな……」
「どうして？　アスタはあの人達みたいに、イルカを食べる行為自体を否定するの？　イルカが賢いから？　可愛いから？　殺し方が残酷だから？」
「違う……違うの、そうじゃない。でも、食べる事を正当化はできないよ……貴方を愛しているからといって、食べる理由にも……」
「どうせ私は死ぬの。だったら最期は、動物病院で解体されるより、アスタの胃袋の中がいい」
「……うん、わかった」
「スジイルカの腹肉といえば絶妙な珍味なんだからさ、婆さんと二人で美味しく食べてくれよな」
それっきり、声は聞こえなくなった。脳への血流が停止したのだろう。
千鳥の頚椎に開いた三センチほどの穴から、一気に赤い液体が噴出し、私の顔へと一気にかかる。涙も、血も、より塩分濃度の高い海水へと全て流れ落ちていき、真っ青だった海水はうすピンクへと染まっていった。

＊

「はい、ふみよおばあちゃん」
「ん……この匂いは……海豚！　海豚かね？」
「そうだよ、イルカ。私が獲ってきて、私が調理したスジイルカの腹肉煮込み」
「おぉ……まさか本当に生きながら、海豚が食べられる日がくるなんてねぇ……嬉しいねぇ……アスタちゃん、ありがとねぇ……」
海水浴場で千鳥の首を切り血抜きまで行ったので、臭みはきっと少ないはずだ。絶句する他の海水浴客達から困惑の視線を浴びながら、私は彼女の腹肉部分のみコンパクトナイフで切り分け、それをそそくさと持ち帰った。
イルカ肉は薄切りに切ってから、流水で洗い流し、下煮を施す。後はニンジン、ゴボウなどの根菜やこんにゃくも一口大に切り、鍋に入れてぐつぐつ、ぐつぐつとひたすら煮込む。全て千鳥から教わった調理法だ。
「私の分と、はい、これがおばあちゃんの分。美味しく食べようね。それじゃあ、いただきます」
私は震える右手で箸を掴み、どろどろに溶け込まれた肉片をひとつ口元まで運び、それを奥歯で噛みしめる。

初めて食べるイルカは少し固くて、血の味がした。

PARLOUR's Somnambulist

早川一 (@vaginaeye)

【Dying Rabbit】

夜半の海
外灯の影をまとう木々の陰に潜むささやかな恐怖
灯りに惹かれ踊る羽虫
黒灰色の風が騒がしい沈黙を運び込む
空っぽの宝石箱に詰まった排泄物を啜る音はひとり分

【鏡】

海面（みなも）に映る月が綺麗だったから
あの人にも見せてあげたくて、掬いにいった

【alone】

海に行った話

海に行ってきた

月の沙漠

彼女と行った海に、今度はひとりきりで

あの夏の海は、もうそこには存在しなかった

一人で眺める海の彼方を

そこにはなにもないように思えたが、なにもないはずはなく、確実に何かが存在していた

解説

片桐天音／早川一／ジェンガ 2003 ／みみずの紐／
野沢菜

片桐天音

おはようございます。しあわせなみなさんは、打ち上げ花火は好きですか？　お祭りで打ち上げられる綺麗な花火は、みなさんの楽しみの一つだと思います。

綺麗な打ち上げ花火を眺めていると、しあわせな気分になることがありませんか？　あるいは、音を聴くだけでも、身体を動かしたくなるような高揚を感じることがあるでしょう。これってとっても不思議なことですよね。

どうしてしあわせな気分になるか、分かりますか？　実は、打ち上げ花火にはみなさんをしあわせにする成分が含まれているのです。我々は、打ち上げ花火が持つ可能性に注目しています。

我々の第一目標は、みなさんのしあわせです。打ち上げ花火などのイベント、暦の制定や労働の廃止などの改革は、そのための活動の一環です。みなさんが毎日必ずローズ・クォーツに触るのも、しあわせになるための重要な活動なのです。

さて、本日は我々からしあわせなみなさんに、とても重要なお知らせがあります。よく聞こえるように、音量を調節してください。

（沈黙、約十秒）

我々は、みなさんにより大きなしあわせを得てもらうために、新たに開発された特別な装置を体験してもらう計画を進めています。この装置は、みなさんのしあわせポテンシャルを、いま配布されているローズ・クォーツよりも効率的に高めることができます。

しかし、この装置はとても革新的なものです。製造に時間がかかっており、まだ全員に試してもらう準備ができていません。今回、この素晴らしい実験的な計画に、第五エリアが選ばれました。なんてしあわせなことでしょう！

朝食が済みましたら、すぐに中央集会所にお集まりください。遅れるのはしあわせではありません。

これで、本日のお知らせを終わります。では、ローズ・クォーツに触れてください。

（七色パターン放送、約十六秒）

しあわせなみなさんに、愛と祝福のシャワーを。第五エリア放送局がお送りしました。

早川一

【自分のカラダを大切にしないことについて】

ストレスなどからアルコールや性、薬物などへ依存し、自身を大切にしなく（できなく）なる。

このような状況を打ち明けたり、相談したりする相手がいない。溜め込んだストレスを発散させる場（方法）がないと、溜め込まれたものはいずれ爆発するであろう（爆発＝死？）。

前兆はあるのかもしれない。ここでの前兆とはＳＮＳの投稿や生活の乱れからくる肌荒れ、傷の増加など。また、交友関係の乱れなど。

他人を頼ることが苦手であり（他人を恐れているとも考えられる）、もしくは他人と関わることに恐れを抱いているのではないだろうか。何が言いたいのかというと、前兆自体はあれどもそれを隠そうとする意思（有意識か無意識か定かではない）が存在するのではないかということである。そういった意思が存在していることは想像にたやすいが、ではなぜ前兆が観測されうるのかということ。前兆を隠すことが下手である、もしくは単に隠そうとしていないのかもしれない。ともかく、傍目からわかるような変化が多いか。

自身を大切にしない例。

赤の他人（初対面の人間、好感度は初期値）と性的接触を持つこと。倫理・価値の無い最低の人生を生きている淫売の役割演技をする。その場においてはそれで自らを保つことができても、事後にはひどく後悔する。死にたくなるし（希死念慮？）、なぜこんなことをしてしまったのかわからなくって混乱する。

どうしようもなくって、目につくもの全てに八つ当たりをする。とにかくひどく荒れて、気分は最悪。最低の気持ちである。本当に、本当に、二度とこんなことは繰り返さないとそのときには誓っているのだが、しかし、しばらくすると、この愚かな行為を繰り返してしまう。

死に向けて。

（おわり）

ジェンガ2003

何も壊さないために、無生物になってしまいたいという願望を持ったことはありませんか。

人間でいつづけるよりは、いっそたい焼きにでもなってしまえば、嫌われなくて済むぶん楽かもしれない。

でも、それは去勢と同じで、誰かを愛する能力を失うということでもあります。我々は、誰かに傷つけられることを志向しているからです。

それに、たい焼きだって嫌われずに済むとは限りませんよね。

だから変身は、本当に最後の手段にするべきなのです。やむを得ずたい焼きになってしまった場合は、また別の話ですが……

＊

ちょっと前に友達と飯に行った帰りに、前から気になっていた中華食材店に寄ってみたんです。雑居ビルの二階にあるちょっと薄暗い店で、タバコが異常に安く買えるという噂がありました。

さて扉を開き、中国語の挨拶に曖昧に会釈して奥に進んでみると、まああるわあるわ、エキゾチックな売り物の数々。冷凍肉、辛そうな調味料、乾麺、白酒に紹興酒。端のほうには噂通り、タバコも売られていました。

まあ下見のつもりで、白酒の小瓶と中南海をレジに持っていったんです。簡単に会計を済ませて外に出ようとしたら、奥から初老の男性が出てきて、中国語で呼び止められました。「え、えーと、あの……」男性は片手に、直径10センチくらいの金属製の円柱を持っていました。「これ、あげますからね」そして、いきなりその円柱を渡してきたのです。「え、あの、これ……」「持ってって、持ってって」男性は私の背中を押して、店の外に押し出してしまいました。

仕方なく家までその物体を持ち帰ったのですが、どこにも切れ目が見当たりません。しかし底面をよく見ると、なんと放射能マークとキリル文字が印字されていました。どうにか解読してみると、どうやら無線式の核爆弾のようなのです。

核爆弾は、今も私の玄関の棚で起爆を待っています。

みみずの紐

Magic: The Gathering というカードゲームに、「肉貪り」というカードがあります。このカードのフレーバーテキスト（ゲームの世界観を表すテキスト）は、黒という色の性質がよく出ており私のお気に入りの一つです。

《彼のねじくれた精神はこう結論づけた。自分の体を作るのは食べた物である。自分は人間であり続けたい。ならば……》

こんなことにならないよう、生物には自分自身の構成組織ではない食物を食べても、自分の構成組織に作り変えるという機能がついていますね。よかったよかった。

ですからイルカを食べたからと言ってイルカになることはできませんが、数ヶ月もすればイルカ肉も身体の構成組織の一部にはなるでしょう。カレーばかり食べていれば全身がカレーの材料で構成され、そばばかり食べていれば身体がそばだったものによって構成されていくはずです。

逆に考えると、めったに口にすることがない食べ物は、人体の構成組織の中でも低い含有率となってしまいます。私はまだ洞峰公園のバリケンを食べたことがないので、バリケンで構成される人体の部位は皆無なのです。これはダイバーシティの観点から考えると、とても悲しいことではないでしょうか。つまり何が言いたいかというと、ウナギやクジラやイルカなどといった、これから口にする機会が少なくなりそうな食品は、今のうちにどんどん食べて応援！　していきましょう、という話ですね。

さて、そんなことより今すぐ「若おかみは小学生！」の劇場版を見に行きましょう。比較的プロトタイプなお金持ちお嬢様ながらも、労災や自然環境への影響などを第一に優先して考慮する秋野真月。両親の別れを現実に突きつけられ慟哭する関織子の元に、颯爽とスポーツカーで駆けつけるグローリー・水領。子ども向け映画と侮るなかれ、お値段以上に最高の場面が見られる一本となっております。

野沢菜

先日、空想上の山登りツアーを楽しみました。リアルを超えた登山体験、頂上から見える緻密な絶景、そして、森林の奥深くで秘密裏に発展するロマンス……全てが新しく、そして、全てがエキサイティングで、新時代の到来を実感したものです。

空想上のツアーなので、ツアーを通じてできた友人、登頂した時に感じた達成感、絶景に心奪われたあの時間、ロマンスを目撃してしまった時の禁忌を覗いてしまった高揚感などは、全て空想上のものであり、実際に経験したものではありません。

ですが、例え空想上で体験したものとしても、その時に感じた様々な感情は、まがい物ではなく、確かに本物なのです。当作品には、そのような気持ちが込められています。

大江戸.com
のざわな

あまねです。ama.ne.jpの
技術連絡担当者が
（技術担当：ことこ）
に なりました。

女 裸 SEX
ジェンガ

同性愛のイルカの方が
生涯長く添い遂げる
らしいです。（今日の豆知識）
みみずの紐

泥水をすすれ
早川

ここから「Lilie von Prora」の感想をお聞かせください！

または、https://goo.gl/forms/NrD3V1WP9hvag76q2

表紙イラストを含む全ての作品は CC BY 4.0 でライセンスされており、ライセンスの条件に従っている限り自由に利用できます。CC BY 4.0 の詳細は以下の URL で確認できます。
https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/

書名 ..... Lilie von Prora
発行日 2018/11/25
発行 ..... 変態美少女ふぃろそふぃ。
印刷 ..... 文伸印刷株式会社 コミックモール事業部
連絡先 ..... circlemaster@hentaigirls.net

変態美少女ふぃろそふぃ。